



**Data** 2023-139

監督・脚本：イ・ヘヨン  
 出演：ソル・ギョング/イ・ハニ/  
 パク・ソダム/パク・ヘス/  
 ソ・ヒョヌ/キム・ドンヒ

## 👁️👁️ みどころ

『007』シリーズをはじめとするハリウッドの「スパイもの」も面白いが、張芸謀（チャン・イーモウ）監督や婁燁（ロウ・イエ）監督による中国の「抗日スパイもの」はもっと面白い。すると、韓国の「抗日スパイもの」は？

ユリオン（幽霊）は誰だ？日本統治下にあった1933年当時の朝鮮半島で、朝鮮総督の命を狙う抗日組織「黒色団」とは？そして「ファントム」とは？

その容疑者は、日本人、韓国人の男女4人。新任の警護隊長は自己の“出自”に悩む日本人だから、その追及は妙に厳しそうだ。

前半の“密室”でのハラの探り合い、心理戦から、後半はユリオンを追ったド派手な銃撃戦に！こりゃ面白い！しかし、韓流スターの日本語のセリフは如何なもの？その違和感（耳障り感）はハンパないから、何とかしなければ！



### ■□■「抗日スパイもの」の面白さは、中国も韓国も共通！？■□■

婁燁（ロウ・イエ）監督の中国映画『サタデー・フィクション』（23年）は、魔都・上海の英仏租界を舞台に、日米開戦の情報を巡って、日米開戦直前の1週間に暗躍するスパイたちのメチャ面白い映画だった。婁燁監督の「スパイもの」の面白さは『パープル・バタフライ』（03年）（『シネマ17』220頁）でも実証済みだし、張芸謀監督の『崖上のスパイ』（21年）（『シネマ52』226頁）でも、「抗日スパイ」を中心とする中国の「スパイもの」の面白さは実証済みだ。

それに対して、「抗日スパイ」を主人公にした韓国映画の「スパイもの」の面白さは如何に？それを本作でじっくり味わいたい。本作の舞台は、韓国が日本統治下にあった1933年の京城。そこでは、日本総督の暗殺を狙う抗日組織「黒色団」のスパイ“ユリオン”が暗躍していたが・・・。

## ■□■原題は？英題は？ファントムとは？ユリオンとは？■□■

本作の原題は『유령』、英題は『PHANTOM』だが、それだけでは何の映画かサッパリわからない。

英題の『PHANTOM』＝「ファントム」と聞けば、私は劇団四季のミュージカル『オペラ座の怪人』（『シネマ 2』241 頁）や、映画『オペラ座の怪人』（04 年）（『シネマ 7』156 頁）を思い出ししてしまう。『オペラ座の怪人』におけるファントムは、オペラ座の地下に住み着いている醜い顔の怪人の名前だったが、なぜ本作の英題は『PHANTOM』とされたの？

他方、原題の『유령（ユリオン）』は幽霊のこと。つまり、유령（ユリオン）は、日本統治下にあった朝鮮半島のトップに立つ朝鮮総督の暗殺を狙っている、決して姿は見せない抗日組織「黒色団」のスパイのことだから、日本の警護隊にとってユリオンの逮捕は何が何でも成し遂げなければならない任務だった。

そんな本作の邦題は『PHANTOM ユリオンと呼ばれたスパイ』と、バカ長いけれども誰にでもわかりやすいものになっている。これでは、この邦題を見ただけで本作のイメージができてしまうから、その是非は・・・？

## ■□■ユリオンは誰だ？容疑者は、日本人を含め 4 人の男女！■□■

本作の時代は 1933 年。冒頭に日本統治下の京城では、抗日組織「黒色団」のスパイ“ユリオン”が暗躍していることが明示されるが、その実態を日本側は全く把握できていないらしい。しかし、新たに赴任した警護隊長の高原海人（パク・ヘス）は総督暗殺を阻止するため、朝鮮総督府内に潜む“ユリオン”を捕まえようと罠を仕掛け、ある人里離れた崖の上のホテルに容疑者たちを集めることに成功したらしい。

容疑者とされたのは、①保安情報受信係監督官の村山淳次（ソル・ギョング）、②暗号記録係のパク・チャギョン（イ・ハニ）、③政務総監秘書の佑璃子（パク・ソダム）、④暗号解読係長のウノ（ソ・ヒョヌ）の 4 人だが、なぜこの 4 人なのかは観客に全く示されないので、観客は？？？

そこで高原は、この 4 人に対して「ユリオンはあいつだ」と名指しをする、もしくは「ユリオンは俺だ」と自白するかの選択を迫り、もし丸 1 日の間に、「ユリオンは誰か」が判明しなければ、4 人とも拷問にかけると宣言！弁護士の私は、罪刑法定主義や刑事司法における適正手続（デュープロセス）の重要性を勉強したから、高原のこんなやり方がナンセンスなことはよくわかるが、日本統治下の韓国ではそれもやむなし！容疑者とされたこの 4 人の男女は、それぞれどんな決断を下すの？

## ■□■警護隊長のキャラ vs 容疑者たち 4 人それぞれのキャラ■□■

お前がユリオンではないか？そんな容疑をかけられた 4 人の“内訳”は、2 人は韓国人、2 人は日本人、また 2 人は男性、2 人は女性だ。他方、警護隊長の高原はもちろん日本人だが、彼の母親は韓国人だったから、彼が大日本帝国軍人として立身出世を遂げていくにはそれが障害になったうえ、彼は自分自身のそんな“出自”に悩み続けてきたらしい。

それに対して、保安情報受信係監督官の任務に当たっている村山は、自分が日本人であることに何の疑問も持っていないから、高原のそんな悩みを理解できるはずはない。そのため、この 2 人の日本人同士の間には、最初から取り調べる側と取り調べられる側という立場の違い以外にも、立身出世や出自を巡って大きな違いがあったから、この 2 人の“対決”は興味深い。

他方、解散後、なぜか同じ部屋に入れられた、暗号記録係をしている韓国女性、チャギョンと、日本人、佑璃子との“バトル”も面白い。まずは、政務総監秘書という特権的な立場にありながら、「お前がユリョンではないか」との容疑をかけられたことに怒り狂っている佑璃子の姿に注目！こんなヒステリックなバカ女（？）がユリョンであるはずがない。観客は誰もがそう思うとともに、それをすべて冷静に受け流している美女のチャギョンこそがユリョンではないか、と考えるはずだ。

また、暗号解読係長のウノは、「家族の元に早く帰らなければ！」ばかりをアピールする、太っちょ（？）でマイホームパパ丸出しの下級役人だから、こんな男が総督の暗殺を狙うユリョンなはずはないだろう。誰でもそう思うてしまうが・・・。

### ■■■韓流俳優の日本軍人役は無理！変な日本語に違和感が！■■■

本作は、なぜかパンフレットが販売されていなかったが、ネットサイトの情報は多い。その中の一つが「デイリー・シネマ」だ。そこでは、「全員が一癖も二癖もある個性的なキャラクターで寸分たりとも目が離せない。」と書かれ、続いて、「セリフの半分以上が日本語で交わされるが、ソル・ギョングは 2005 年の作品『力道山』で力道山役を演じており、流ちょうな違和感ない日本語を披露している。警護隊長の高原の台詞は 100%が日本語だ。もともとこの役は日本人俳優が演じることが決まっていたのだが、コロナ禍で出演が難しくなり、パク・ヘスが日本語を猛特訓して演じている。迫力ある台詞のひとつひとつから作り手の本気度がびしびしと伝わって来る」と書かれている。

しかし、私の受け止め方はこれとは正反対で、ソル・ギョング演じる村山の日本語のセリフにも、パク・ヘス演じる高原の日本語のセリフにも大きな違和感がある。なぜなら、ヒステリックに喚く、パク・ソダム演じる佑璃子の日本語のセリフはそれなりに誤魔化されているから違和感が少ないが、韓国を代表する 2 人の韓流スター、ソル・ギョングとパク・ヘスの日本語は、ハッキリ言ってヘタすぎるからだ。

### ■■■女同士の反発は、後半から終盤に向けて固い連携に！■■■

「能ある鷹は爪を隠す」。本作の前半、「政務総監秘書」という特権を笠に着て、ヒステリックに喚き立てる日本人女性・佑璃子が、実はそれだ。したがって、前半は同じ部屋の中で反発し合っていた佑璃子とチャギョンだが、後半から終盤に向けては、同じ抗日スパイとして固い連携を示し、共に命がけで戦う勇姿が登場するので、それに注目！また、同じ日本人でありながら、己の出自に悩む高原と、ノー天気立身出世を目指す（？）村山間の確執もクライマックスに向けて“ある結末”が用意されているので、それにも注目！

さらに、後半から終盤に向けて観客に対しては少しずつユリヨンの姿が明らかにされていく中、ユリヨンを追いかけることについてへまばかり繰り返す日本の官憲のだらしなさが白日の下にさらされるので、それにも注目！1933年当時の日本は、自己の統治下において朝鮮国内において、抗日スパイによる朝鮮総督の暗殺計画を阻止することすらなかなか出来なかったの？そう考えると、日本人の私は本作を腹の底から楽しむことは出来なかったが・・・。

2023（令和5）年12月1日記